茶倉練は令和の好色一代男、改めイケイケバリバリの霊能者だ。
少なくとも巷ではそういうことで通っている。メンクイな女性たちは目元の涼しげな塩顔イケメンをちやほやし、チャクラ王子とあだ名して持ち上げる。
練が表紙を飾ったスピリチュアルファッション誌は売り上げが伸び、パワーストーンの種類や効能を解説する講座の他、胡散臭い都市伝説や世界の七不思議を紹介するYouTubeのチャンネル登録者数は順調に伸び、先日遂に五十万の大台に乗った。
ちなみにチャンネル名は助手の理一が付けた。『チャクラ王子のチャクラ全開チャンネル』……ださいのは否定しがたいが、没案に比べたらまだマシだ。理一のネーミングセンスは死んでいる。
とはいえ練も一応は人間の範疇である以上、無理が祟って体調を崩すことはある。

「う〝〜ん……やかましわアホんだら」
枕元で充電中のスマホのアラームが鳴り響く。ベッドの中でもぞもぞ身動ぎし、手探りして止める。
体が熱くてだるい。かるく咳き込んで喉をさすり、机の抽斗から取り出した体温計を腋に挟む。水銀の数値はみるみる上がっていく。
「……7度8分か」
舌打ちが出た。
練は平熱が低い。理一に冷血人間といわれる所以だ。それが37度を記録しているあたり本格的にまずい。
風邪をひいた原因に心当たりがあるだけに、忸怩たるものを感じる。自分で言うのもなんだが、死ぬほどくだらない理由だった。
茶倉練二十六年の人生における痛恨の失態にして最大の汚点。人に知られる位なら新興宗教団体が隠れ蓑にしてるヨガサークルに全財産寄付した方がなんぼかマシ。
練は新宿一等地のタワーマンションに事務所兼自宅を構えていた。
私生活は扉一枚隔てた隣室で営んでいるものの、立ち入りを許された人間は極めて少ない。セレブなセフレたちとは各々の家やホテル、もしくは事務所のソファーで致していた。プライベート空間を荒らされるのは生理的に耐え難い。
公私の線引きはきっちりと、たとえ二股三股かけても他人に敷居を跨がせないのが彼の信条である。
昨晩喧嘩別れした女に謝罪メールを打ちかけ、馬鹿らしくなって放りだす。スマホがベッドで跳ねて裏返る。
現時刻は午前九時、カーテンの隙間からは爽やかな陽射し

がさしこんでいた。
「忘れとった」
布団を被り直した状態で枕元をさぐり、のろくさスマホをいじる。朝イチで株式相場をチェックするのが、投資を始めてから欠かした事ない日課だった。
「悪うないな」
自分が買った株がまずまずの上がり値を示しているのに満足し、次いでニュースサイトを流し見る。練が贔屓にしているお笑いコンビがＭ１グランプリの予選を通過していた。めでたい。
また咳き込む。気持ちが悪い。しかしまだやることがある。スマホをいじり、打ち合わせの予定を入れていたクライアントにＬＩＮＥする。
『練です。今日の十四時の約束、来週の月曜に振り替えてもいいですか』
『どうしたの』
『体調悪くて』
『大丈夫？　何かしてほしいことある？』
『お構いなく。寝てれば治ります』
『遠慮しないで、私とあなたの仲じゃないの』
ただのセフレや。
『本当に大丈夫なんで。伝染したくないですし』
『練……』
『いい年した社会人なのに自己管理が甘くてお恥ずかしいです』
『ちゃんと温かくして寝てなきゃ駄目よ、この時期の風邪は長引くんだから』
『早く元気になって真由美さんに会いたいです』
『私も』
ほぼ同じやりとりを三回連続で別の相手と交わし、会話を終える。
「これでよし」
週末の予定を全キャンセルし、スマホを置こうとしたそばから新たなメッセージを受信。お見舞い代わりだろうか、胸を寄せて上げたきわどい自撮りが送られてきていた。
だるい。食欲がない。何か腹に詰めなければとわかっているが、ベッドを出るのが億劫だ。最寄りの病院は車で十分、熱に浮かされた状態で運転できるか心許ない。
助手を呼ぼうか迷い、やめておく。
お節介が服を歩いてる理一のことだ、練が風邪をひいたと知れば飛んでくるに決まってる。それが嫌だ。
「っ、は」
来た。
体内で何かが目覚めて暴れ出す。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ぁ」
シャツの胸を掴んで突っ伏し、残りの手でシーツをかきむしる。下半身がずくんずくんと脈打ち、体の中から犯される感覚に悶え、胎児の姿勢で縮こまる。
練が弱ると化け物の活動が激しくなる。宿主が衰弱したのを見計らい、体ごと乗っ取ろうと蠢きだす。
普段は数珠と霊力で押さえ込んでいるが、きゅうせん様の正体は古の日水村で神と仰がれた、強大な化け物だ。宿主の呪縛が緩めば本来の力を取り戻す。
「ぅぐ、はァ」
これが初めてじゃない。昔はよく熱を出して寝込んだ。祖母の世司は跡取りの孫を厳しく躾け、極寒の真冬でも禊をサボるのを許さなかった。練は毎朝庭の井戸端へ赴き、自分の手で鶴瓶を繰り、冷たい水を頭からかぶった。
もともとそんなに丈夫な方ではない。大阪にいた頃も季節の変わり目には風邪をひいた。
優しい母は練が寝込むたび、白桃の缶詰を開け、卵でとじてしらすを和えたおじやを作ってくれた。
両親が事故死して祖母に引き取られたのち、熱を出す回数は格段に増え、月に一度は学校を休まざる得なくなった。
『茶倉の跡取りがそんな軟弱でどうする、情けない』
寝込んだ練の世話は通いの女中がした。土鍋で煮た粥の味は殆どわからなかった。
当時の練は「慣らし」の期間中で、きゅうせん様を完全に制御しきれてはいなかった。
ただでさえ精力絶倫なきゅうせん様が、宿主の隙をほっとくはずがない。熱と体調不良で抵抗できないのを幸いとばかり、苗床に作り変えた体内で激しく蠢き、前立腺をぐにぐに押し潰す。
練が成長し力を付けていくのに伴い、きゅうせん様は大人しくなった。成人済みの現在なら、余程のことがない限り暴走を防げる。
練の体と心さえ健康ならば。
「……調子、のんな」
下っ腹がずくんずくん脈打ち吐き気を催す。全身の肌が性感帯に置き換わり、シーツと擦れ合うのがもどかしい。体の中にきゅうせん様の存在を感じる、鼓動が響く。腹の奥底に触手が根を張り、直腸を巻き返す。
化け物に好き勝手される屈辱と怒りに目がくらむ。
とりあえず薬飲まな。
洗面所の棚に熱さましあったはず。ベッドを下りようとした瞬間、膝から力が抜けて崩れていく。まずいと思った時

には遅く、床に倒れていた。
「痛……」
手を伸ばす。焦点がブレる。視界が歪む。どうにか洗面所に這って行き、壁を支えに立ち上がり、抗生物質の錠剤を呷る。移動中もずっと体が火照り、腹の奥が疼いていた。洗面台の縁を掴んで腰を浮かし、途中で力尽きて蹲り、震える手を股に伸ばす。
自分の手で陰茎を慰め、身の内に籠もる熱を逃がせば楽になる。その代わり最低に惨めな気分を味わい、自己嫌悪に沈む。

子供の頃の悪夢が甦る。汗をびっしょり吸った布団の上。
『きゅうせん様、も、許して、体しんどい、イかせてください、あッあ』
片手で不器用に尻をほじくり、残りの手でペニスをしごき切なげに泣く練の痴態を、冷たい目をした祖母が障子の隙間から観察している。
「ざけんな、畜生の分際で」
解熱剤の箱をぐしゃりと握り潰す。またあんな思いをする位なら死んだ方がマシだ。
練はもうこどもじゃない。茶倉の家を出て何年も経った。障子の隙間から見張る祖母はいない。
手の中の箱を乱暴に壁に投げ付け、再び這ってベッドに戻り、這い上がろうとしてスタンドミラーを倒す。
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！」
きゅうせん様が一際激しく暴れ、ズボンの中心にじんわり染みが広がる。奥歯を噛んで俯き、床に額を押し付け、小刻みに震える手を下着に潜らす。
キツく瞑った目の裏に思い描くのは、自分の下でよがる理一の痴態。
「はあっ、はあっ」
はよ抱きたい。めちゃくちゃにしたい。オナニーするのは久しぶりだ、普段は女を抱いて発散していた。しごくのは前だけで後ろはさわらない、練にも男のプライドがある。

同時刻、新宿歌舞伎町のラブホテル。
理一はダブルベッドの端に腰掛け、スマホでパズルゲームをしていた。バスルームからはシャワーの水音が響く。五分後、スライドドアが開いて濛々と蒸気が流れだす。
「よっしゃ、ラストステージクリアでボーナスゲット！」
ガッツポーズをきめる理一に白いガウンを羽織って歩み寄り、軽い調子で詫びる。

「待たせてごめん」
「いんや、タイミングばっちし」
「準備はＯＫ？」
「そっちもばっちし」
スマホをサイドテーブルに伏せ、勢いよくベッドに飛び乗る。理一が穿いたボクサーパンツを一瞥、男プッと吐き出す。
「何それ、ださ」
「ダチから貰いもん」
タイトな黒地のボクサーパンツには、『下半身タイガース』のロゴがでかでか踊っていた。
この男は理一のセフレだ。知り合ってまだ三か月と日は浅いが、話も合うし体の相性も上々ときてちょくちょく会っている。
昨日は二丁目のゲイバーでひとしきり飲んでだべった後、レイトショーの映画を観に行き、仕上げにラブホで楽しんだ。
「ダチって例の腐れ縁の？」
「そ、ドケチ関西人クソ上司。去年の誕プレ」
「やばいセンスだな」
「てっきりスルーされるかと思ったら別れ際に投げてよこされた、顔面に。んなことよりさ～」
正座の状態のままベッドで跳ね、早く早くと急かす理一。男がまんざらでもなさげに笑い、ガウンを脱ぎ捨てる。
「さっさとしようぜ」
挑発的に舌なめずりし、ボクサーパンツの両端に指をひっかけ、ストリッパーの腰遣いで脱いでいく。理一が下着を放るのを合図に男がのしかかり、首筋にキスをしてきた。
「ん、ははっ、くすぐってえ」
「動くなよ、やりにくい」
「ッ、そこ」
お仕置きに乳首を抓り、引き締まった腹筋を舐め回す。理一は男の首の後ろに手を回し、前戯に応じて喘ぐ。
潤んだ視界の端に右手の数珠がとまり、腐れ縁の顔が脳裏を過ぎる。
烏丸理一は茶倉練の助手だ。
平日はＴＳＳで働いてるが、週末はセフレとラブホにしけこんでヤりまくってる。
理一がゲイになったのは霊姦体質のせいだ。朝昼晩ぶっ通しで悪霊に突っ込まれ、すっかり開発されてしまった。辛うじて日常生活を送れてるのは定期メンテナンスのおかげだ。
数珠が黒く濁る都度茶倉に「除霊」してもらっているからこそ、週末は常に２・３人キープしてるセフレと会い、遊

びまくれる。
もし霊姦体質に目覚めなければ女の子が好きなまま、可愛い彼女を作っていたかもしれない。
「はっ、あ、気持ちいい」
「乳首いじられんの好き？　淫乱だな」
「お前が上手いから、ふッ、や」
「下も我慢汁でぬるぬるしてる。ローションいらずだな」
「付けろよちゃんと」
「はいはい」
男の手がゆるゆるペニスを擦って育て、理一も相手の乳首を吸い立てる。
「数珠、外さねえの？」
「ん。したままで」
「大事なものなのか」
「まあね」
男が輪にした指でくびれを括り、裏筋をくすぐって性感を高めていく。対抗心を呻られた理一は男の股間に突っ伏し、いやらしくペニスをしゃぶる。茶倉のブツよりやや小さい。なんて、比べるのは失礼だぞ。フェラに集中しろ。